第８回

# 博報教育フォーラム レポート

Hakuho Education Forum Report 2011

テーマ: 学びをシェアする

The 8th Hakuho Education Forum　2011年2月19日　日本工業倶楽部 於　主催／博報財団　後援／文部科学省

# 博報教育フォーラムは

## 優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。
このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

# 博報教育フォーラムプログラム

### 1 基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などをしていきます。

### 2 事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例をフォーラムのテーマに沿って発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、毎年のキーワードをもとに、別の観点から眺めるとどうなるか?魅力的な教育モデルだけでなく、子どもたちへの教育実践者の熱意が伝わってきます。

### 3 ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。基調講演、事例発表の後、展示されたポスター、子どもたちの作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する、参加者と発表者、参加者同士のネットワークづくりの場です。

### 4 パネルディスカッション

フォーラム出演者全員が登壇し、子どもたちのために今、何が必要かを問いかけ、新たなビジョンを提案していきます。基調講演、事例発表、ポスターセッションでの交流を踏まえ、会場全体が積極的に関与する「生きたパネルディスカッション」です。実践者の知見を生の声でお届けします。

## 第8回博報教育フォーラム

テーマ：

# 「学びをシェアする」

子どもたちは毎日の生活の中で様々な人と出会い、その中で何かを得て成長しています。私たち大人は、子どもたちに、自分たちが持つものを伝え、残そうと、上から押し付ける姿勢をとってしまったり、自分で描いたシナリオに沿って進めようとしがちです。しかし、人と人が出会い、かかわりあう中で、お互いが持つ異質なものを認め、共に考えることによって、学びはより一層深まり、更に新しい展開が生まれてくるように思います。大人たちが「与える」から「シェアする」へと意識を変えることによって、単に自分の持つものが伝わるだけでなく、学びは子どもたちの中に深く沁み入り、広がり、さらに大きな学びへつながっていく。そんな学びを共に考えてみませんか?

第8回博報教育フォーラム　「基調講演」ダイジェスト

# 学びをシェアする

鹿毛　雅治　慶應義塾大学 教授

今回のテーマ「学びをシェアする」を掘り下げながら、「他者の他者性」「場/空気のシェア」「謙虚・共感」などのキーワードを軸に、「シェア」が持つ意味を慶応義塾大学・鹿毛雅治教授がわかりやすくお話しくださいました。

## 「所有」から「共有」へ

今回のテーマは「学びをシェアする」です。「シェア」とは何か?最近、「カー・シェアリング」が流行っていますね。車を「所有」することから、みんなで「共有」するというように、世の中の価値観も変わってきています。

教育の話としてシェアを考えていきたいと思いますが、私たちは基本的に教育、あるいは学習を所有として考えてきたのではないでしょうか。学習というのは知識を所有することであり、教育は知識を伝えることである。それは「伝達型教育モデル」であると言えます。学習者に対し、教師が一方的に知識を伝達する。一斉学習、一斉授業は学校で見られる典型的な教育形態です。

シェアという観点から考えてみますと、このモデルは知識を所有している者が伝え、学習者に所有させるというモデルです。この伝達型教育モデル自体を問い直してみる必要があるのかもしれません。

## 学力の剥落現象

このモデルによって学力について考えてみると、勉強というのはこなす作業であって、このこなす作業を通じて、たとえば知識とか技能の獲得が行われます(図1参照)。それと同時に、実は信念も獲得されていく。

たとえば、物量主義—「たくさん知識があったほうがいい、技能もたくさんあったほうがいい」—あるいは、結果主義—「結果がよければいいんだ」—そして、暗記主義—「覚えればいいんだ」という信念です。こういった学習プロセスによって、私たち教育者、子どもたちにも、「勉強するというのはこういうことなんだ」という信念(注1)が、知識と技能と同時に獲得されているのではないでしょうか。

実はそこが悪循環に陥っています。「たくさん覚えればいい」、「結果がすべて」という学習が進むと、こなす作業という、砂を噛むように味気ないものが学習だということになる(注2)。もちろん、学びの魅力や意欲も失われてしまう。ご承知のように、今、学習から離脱してしまう子どもたちが、たくさん生まれています。

このような勉強は本当に知識や技能の獲得になっているでしょうか。たとえば、試験勉強はあたかもメッキを塗るような作業であって、知識としての金メッキは試験の当日だけ光り輝いていればいい。ただし、一夜漬け的な知識はそもそもメッキですから、時間の経過と共にはがれ落ちてしまう。「学力の剥落現象」です。学力を貯金のようにため込む教育は、必ずしも子どもたちの身になっていないのではないかと思います。

## 知・情・意の一体化

「学び」を心理学的な定義で言うと「体験を通して獲得すること」です。体験を通して知識や技能を獲得する。私が大事だと思うのは、もうひとつの側面です。

体験を通して「態度」を獲得すること。これも学習だと言われています。「態度」とは、ものの見方や価値観、信念を獲得することです。学習は知識、技能にとどまらず、人が人として育つ大もと

(注1)東京大学 市川伸一先生のご研究から　(注2)跡見学園女子大学 藤沢伸介先生のご研究から

図1.所有としての学習

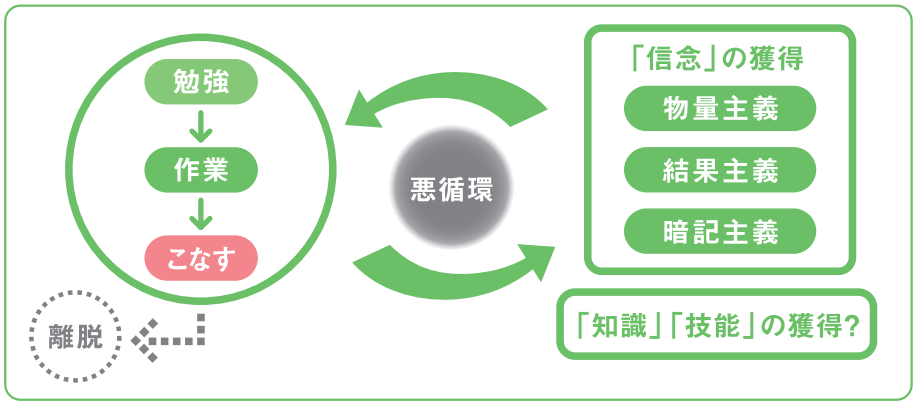
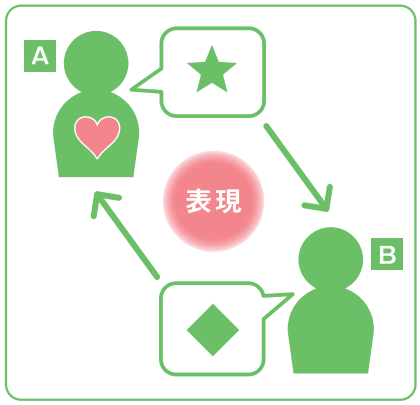



図2.学びのシェアの基本図




を育てていくものだということが見えてきます。

学びは体験を通した問題解決のプロセスなんですね。そのプロセスでは、「なぜ?」とか、「どうすれば?」「なるほど!」「納得!」とか、「身にしみてわかった」という知的な側面のみならず、「ワクワク」「ドキドキ」、「悲しい」「悔しい」とか、「共感した!」「感動した!」とかいう情の部分がある。さらに言うと、「よし、頑張ろう!」「今度こそ!」「挑戦しよう!」というような意の部分もあります。このように知・情・意が一体化した、予定調和的ではない、ダイナミックな学びのプロセスが展開されていくことにこそ価値があります。

## 他者の他者性と学び

こうした学びは、個人の中で起こるわけではなく、他者や社会とのかかわりの中で生まれます。コーディネーターの嶋野先生とお話した時に、「他者の他者性」というキーワードが出ました。

「私とあなたは同じ」という世界で生きていることに対し、「他者の他者性」ということを前提にして考えたい。人と人はものの見方、考え方が違うということを前提に、コミュニケートしようとしたり、学び合おうとすることですね。すると、その人の学びや生き方は大きく違ってくると思います。

このようなことは、学ぶ「態度」、学校教育の中で「他者の他者性」を学ぶということにほかなりません。これは単なる知識とか技能を学ぶことを超えた、「大きな学び」につながるのではないでしょうか。

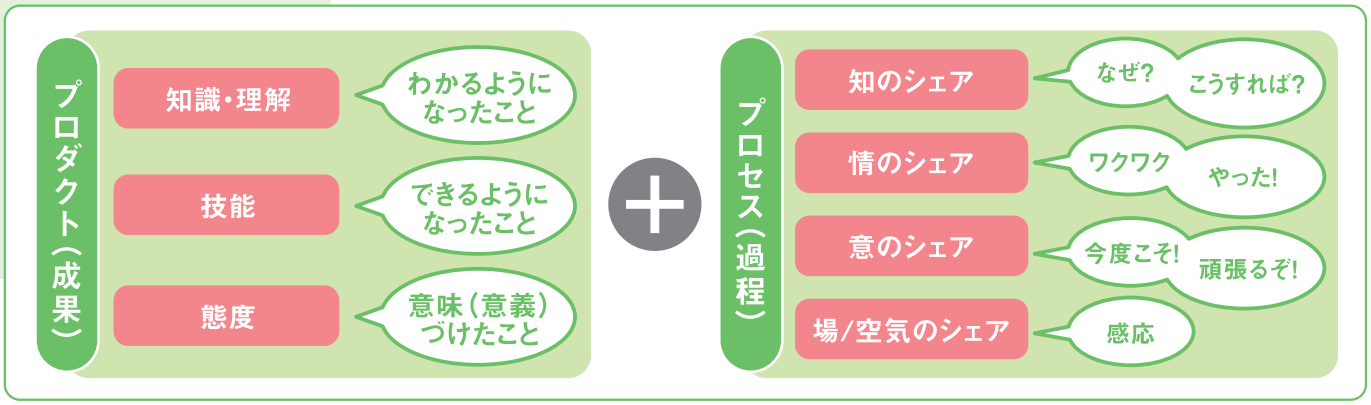
それと、以前、嶋野先生から「『学び』って動名詞なんだよね」という話を伺って、目からウロコでした。結果であると同時にプロセスを指すことばだなあと。シェアを考える上で、学習成果だけではなく、動名詞としての「学び」「プロセス」がキーワードになってくると思います。

## 学びのシェアの基本

シェアの基本には、2人の人がいて、ある人が想いを表現する、そして伝えるというプロセスがあると思います(図2参照)。

「表現」とは、人の内部にあった考えや想いを外化することです。たとえば、Aさんが考えたこと(★)をBさんに表現します。BさんはAさんが考えたことに刺激され自分なりに考えたこと(◆)をAさんに返します。そしてAさんはそれを受け止め自分なりの解釈(♥)をします。ポイントは、Aさんの考えがBさんの考えに影響を及ぼし、さらにAさん自身の考えも変化するというプロセスです。そこには認識の変化だけではなく、「理解してもらえてよかった!」など、情意的な体験も含まれています。これが「学び」なんですね。何かがわかるようになる、できるようになる、あるいは価値観が揺さぶられるということが起こる。知識は情報として伝達されるだけでなく、その人なりに解釈されて、シェアされます。たまたま言語表現の例を話しましたが、表現方法は技だったり、パフォーマンスの場合もあります。

図3.シェアの視点から、学びを再考する




## 知・情・意のシェア

では、学びにおいて何をシェアするのでしょうか?大きく2つあるのではないかと思います（図3参照）。ひとつは「プロダクト（成果）」のシェアです。「昨日までの授業でこういうことを学んだ」ということをみんなでシェアする場面。

体育の授業で蹴上がりができた子が、「じゃ、みんなの前でやってみて」と言われ、その場でやってみる。先生が「ここを工夫すれば?」と、成果をみんなでシェアすることかもしれません。

ただ、私自身は、このプロダクトのシェアだけではなく、「プロセス（過程）」のシェアも大事だと思います。ブレーンストーミングなんて言いますが、「なぜ?」とか、「こうすればいいんじゃないの?」みたいに、お互いに思ったことをそのままポンポン言い合うプロセスでアイデアをシェアすることができる。

知的な側面だけではなく、「情」もシェアする。ワクワクしているとか、「やった!」とか、「どうなるかなあ」とみんなで固唾をのんで見守ったりとか、「今度こそ!」とか、「頑張るぞ!」という意志のシェアもそこには含まれていますね。

## 場／空気のシェア

知・情・意の一体化が主体的な学びのポイントだったと指摘しましたが、ここで提案したいのは、「場／空気のシェア」です。

学校を訪問して、授業を参観するたびに思いますが、教室にはそれぞれ固有の「空気」がありますね。子どもたちが真剣だとか、笑顔があるとか。空気というものが授業の質を表しているなとつくづく思います。授業の質を表しているということは、学びの質を表しているということですね。

最近、「無意識の認知」という考え方が心理学で注目されています。人間の行動をすべて意識で説明するのは無理だということです。私たちは情意面、意識はしないけれど何となく感じているものに基づいて行動している。

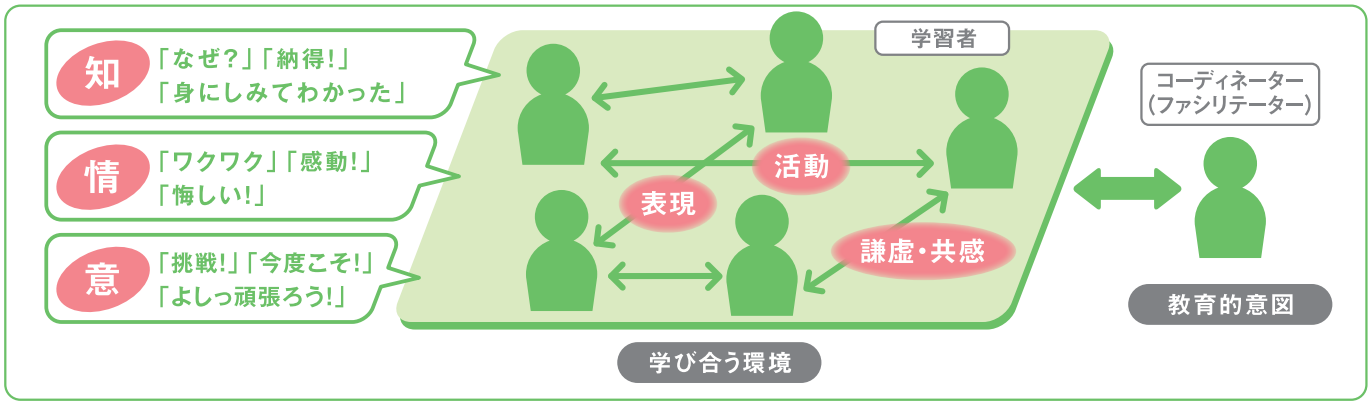
職場もそうだと思いますけれども、みんながピリピリしていて、目がつり上がっていると、空気がそれに応じた空気になりますよね。

これに対し、授業研究がすごく豊かな学校というのは、「今日、あの子がねえ」という話が職員室で自然にあって、すると笑顔で「ああ、あの子ってそうだよねえ」とか、「彼はすごい成長したね」といった話が飛び交って、しかも情報が飛び交うだけではなくて、教師としての喜びが表情に出ています。

そんな空気に満ちている職場だと、気持ちが変わってきます。人間とはそういうもので、頭だけで仕事をしていないんですね。私たちは知・情・意を一体化して生活している。

私たちは「場／空気のシェア」をしている。さらに、そこで学んでいる。大人も子どもも同じです。「場／空気のシェア」という体験は、微妙ですけれど非常に強力ですね。怖いことでもありますけれども。子どもたちは、場と空気に敏感に感応して生活しているのです。

図4.場のデザインとコーディネーター




## 学びを願う存在として

私たちは「学びを願う立場」でもあります。こういう学びをしてほしいなとか、こういうことを考えてほしいなとか、教育的意図を持っている存在でもあるんですね。

これから、先生方による3つの事例発表があると思います。子どもたちよりも先に生まれた者が、これから育っていく者に向かい合って教える。それが教育の仕事です。では、私たちは「学びのシェア」から何を学ぶべきでしょうか。

教師の役割を、仮に「コーディネーター」と呼んでみます(図4参照)。学ぶ場をデザインする主体、あるいは企画を運営する主体です。

3つの事例発表でもそうですが、みんなが平等な立場で、自然に学びや場が生まれてくるわけではないんですね。ある場があり、学習者がいます。そこに、コーディネーターがいて、教育的な意図を持って働きかける。学び合う環境をつくるということです。その結果、子どもたちがそれぞれ十人十色の学びをする。さらに、場の中で交流というか、「学び合い」が起こる。コーディネーターは学びの場をコーディネイトするだけでなく、学びの「ファシリテーター」(促進者)でもあります。

子どもと大人が対等な立場で学びをシェアするといった時に、教育的な意図を捨てていいのか。私は違うと思います。だから、難しい。教育の場には、やっぱりそれを組織する側の意図があるはずです。ですので、その主体は何をすべきなのかということが必ず問われます。子どもたちに学びを丸投げするというのは、教育的な責任を果たしたことにならないと思います。

## 学びをシェアするために

最後に、「学びをシェアする」のイントロダクションになるような、重要なキーワードを3つ提示したいと思います。「活動」「表現」「謙虚・共感」です。お話ししてきたように、場では活動が起こり、さらに表現が行われます。

そして、もうひとつ大事だと思うのは、「謙虚・共感」です。これは学ぶための心構えといいますか、このような学びが起こるためには、まず謙虚でなければいけないと思います。大人だからといって、一方的に教える立場ではなくて、学び合う一員になるわけです。子どもたちに共感して一緒に学びをつくる。そのプロセスも成果も分かち合うと同時に、一緒にそのプロセスをつくり上げていくということが求められているのかもしれません。

**鹿毛　雅治**
慶應義塾大学　教授

慶應義塾大学教職課程センター助教授、スタンフォード大学心理学部客員研究員などを経て、2005年に慶應義塾大学教職課程センター教授に就任。主著に『教育心理学の新しいかたち(心理学の新しいかたち)』(誠信書房)、『子どもの姿に学ぶ教師-「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』(教育出版)他。

第8回博報教育フォーラム　「事例発表」より

Case.1

# 顔がつながる島ネットワークを日本中に

沖縄県　沖縄県立那覇特別支援学校　大田　幸司　教頭

## 特別支援教育に島ネットワークを

沖縄県八重山諸島は障がいのある子どもたちのための専門機関がない。それは、地域住民にとって過酷な現実である。しかし、沖縄県立那覇特別支援学校の大田幸司教頭は、島の相互扶助ネットワーク「ゆいまーる」の伝統に着目する。

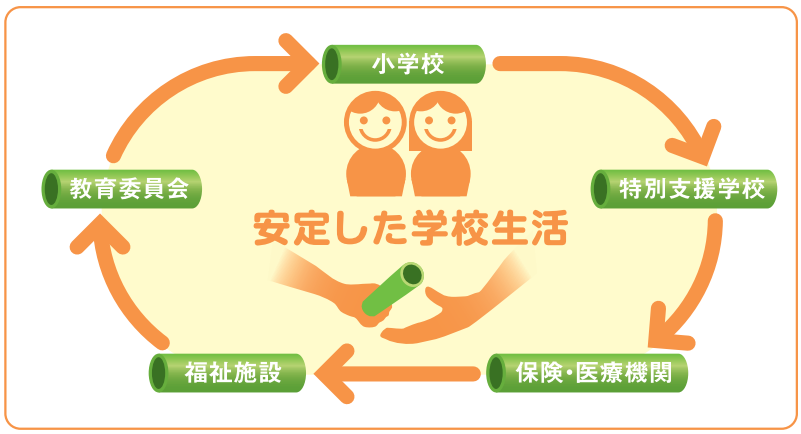
島では昔から農耕作業や祭りなどを協働で行ってきた。「ゆい」は「結合・協働」、「まーる」は「順番」を意味する。誰もが信頼し合い、地域のために小さな力を平等に出し合い、連携しようという考え方だ。大田教頭はゆいまーるの伝統を生かし、島の小さな機関が互いの資源や力を出し合い、障がいのある子どもたちを支え合う「顔がつながる島ネットワーク」ができないかと考え、その構築に奔走した。

## 人と支援をつなぐバトンリレー

大田教頭は支援学校のセンター的機能の整備を図る。研修の地理的ハンディを克服するため「筑波大学特別支援教育センター」と連携し、「e−ラーニング」を活用。2年間で延べ500名が参加。ICTにより、離島と専門機関をつなぐことができた。

県外から移住してきた小学2年生A君のケースでは、発達障がいの可能性に気づいた担任が支援学校に相談。大田教頭は学校訪問し、授業参観、心理検査、保護者と担任の相談を経て、巡回福祉相談につなぐ。A君はアスペルガーと診断され、大田教頭は保健師、担任、保護者と共にA君の特性に基づいた支援を夜遅くまで話し合った。学校は指導法を見直し、A君の個性に応じた指導が行われ、A君は落ち着きを取り戻す。支援のバトンリレーがつながった時、保護者が変わり、学校が変わったと大田教頭は確信した。それからのA君は島ネットワークの環境を生かし、確実に成長していった。

学校生活を支える特別支援のバトンリレー




## 島から全国に広がるボーダレスな支援へ

さらに、言語療法士、福祉コーディネーター、臨床心理士とチームを組み、沖縄本島の医師とメールで連絡を取り合いながら支援を実施。福祉機関の行う療育相談、保健所の行う専門健診が合同で総合療育相談として行われるようになり、予算と資力も島ネットワークに統合される。まさに、専門家チームの姿が島にはすでにあった。

私たちの周りには目に見えない壁がたくさんある。しかし、特別支援教育はボーダレスでなければならない。職種や立場の壁や地域の壁を、もっと風通しのいい、島の垣根へとリフォームする必要がある。大田教頭はゆいまーるを基盤とした「顔がつながる島ネットワーク」を、これからも全国に発信していきたいと語った。

Case.2

# 学校と匠と子どもたちの絆でつなぐ伝統文化

京都府　京都市立西陣中央小学校　野口　十三枝　副教務主任

## 地域の匠が先生 伝統文化の街で学ぶ

京都市立西陣中央小学校のある西陣は、伝統産業「西陣織」の他に能・茶道・華道・和菓子などの伝統文化・産業が発展してきた街。同校の敷地は観阿弥・世阿弥の屋敷跡であり、南には晴明神社と茶道を確立した千利休の屋敷もあったと伝えられる。

同校では、生活科・総合的な学習の時間「にじの学習」で、伝統文化や産業に携わる匠を講師に、体験活動を実施。伝統文化を身近に感じることで、その心を知り、子どもが将来大人になった時に、伝統文化が受け継がれてきた地域の素晴らしさを感じ、愛情をもって語れるようにと取り組みを進めている。

▲ 裏千家師範から茶道を学ぶ5年生。

## 本物と出会って 意欲的に学ぶ子ども

一昨年からは6年間のカリキュラムとして、学習活動全体を「ふれる」「であう」「つかむ」「さぐる」の4つに分けて全校で取り組む。本物に触れる驚きや感動から学習に入ることで、子どもたちは意欲的に活動する。

その過程で、コミュニティティーチャーや匠たちの想いと願い、指導者の想いと願い、子どもの想いと考えをすり合わせることが大事だと気づく。授業の前後に、教職員はコミュニティティーチャーや匠と綿密な打ち合わせを重ね、互いに理解を深める。

## 和の心に触れて 想いを伝え合う

4年生は「和の心にふれよう―華道で彩ろう」をテーマに進めた。華道の師範の話を聞き、実際に子どもたちが花を生ける。師範は子どもたち一人ひとりの想いを聞き取り、どんな花を使えばよいかを話し合いながら、花の種類や本数を決めていく。子どもたちは師範の生け方と自分の生け花を比較し、心を込めて花を生けることについて懸命に考えた。

▲ 子どもたちの想いを受けとめる匠。

心を込めて花を生けるためには、花器も大切だと気づいた子どもたちは、コミュニティティーチャーに陶芸を教わり、花器づくりに挑戦。さらに、「自分たちができるようになったことを皆に見てもらいたい」「花に込めた想いや気持ちを伝えたい」と、お世話になった地域の人々を招いて華道展を開催した。花は「時、場所、人」と相手のことを考え、花の命を無駄にせず大切に生けることが「心を込める」ことである。華道の心をしっかり学んだ上で実践できた。

Case.3

# 土佐和紙を通して地域の文化と自然の大切さを伝える

高知県　WASHI STUDIO　かみこや　アウテンボーガルト・ロギール代表

## 和紙の奥深さに魅せられて来日

高知県四万十川源流にある梼原(ゆすはら)町は町の91%が森林であり、和紙の産地として知られる「環境モデル都市」。梼原町立越知面小学校では、「WASHI STUDIO　かみこや」のアウテンボーガルト・ロギール氏が、小学生に和紙づくりを伝えている。

ロギール氏はオランダのハーグ生まれ。製本の見習いを始めた時、紙は印刷したり、何かを書くためのものと考えていたが、一枚の和紙を灯りにかざすと、ひとつの不思議な世界が見えて感動した。

▲ 校庭でコウゾとミツマタの種を植える。

30年前に高知県いの町で土佐和紙漉きに入門。18年前から梼原町に住む。いい和紙を漉くには、いい原料と水が必要。和紙は単なる紙ではなく、和紙の文化と原料、水を育む山の文化を表現していることを知ってもらいたいという。

## 和紙の原料を育て沢の水を汲む

和紙づくりは12工程あり、やることはたくさんある。1年生が原料のコウゾとミツマタの種を撒き、全員で育て、5・6年生が刈り取る。「1年生も何かできるんじゃないか。まだ力もなくて、何時間も作業できないけど、2年生だって少しずつ、順番に。それなら、6年間を通して学年に応じたことはできる」。甘やかさず、厳しすぎず、子どもと同じ目線に立って、和紙づくりを伝えたいと考えた。

和紙漉きで最も大事なのは水。カルキが入った水道水は使えないので、近くの谷に水を汲みに行く。その時、なぜ沢の水を使うのか、ここまで汲みに来なければいけないのか、水の質は和紙づくりにどう影響するか、子どもと共にゆっくり考え、話し合う。和紙づくりを通じ、山の自然と文化、梼原の暮らしや歴史を肌で感じとる。

▲ 沢の水を汲みながら環境学習。

## 思い出がいっぱいの和紙の卒業証書

子どもたちは近所のおじいさんやおばあさんにも、コウゾ、ミツマタの蒸し方やはぎ方、切り方などを教わる。1年生から体験を重ねているので、6年生になるとプロの顔をして漉く。ロギール氏と同じ紙漉きの顔になっている。

6年生が漉いた和紙は卒業証書になる。卒業式では一人ひとりに、和紙漉き体験の写真を添え、額に入れて授与。6年間の同校の生活が感じられる証書は、どの家庭でも大切に飾られる。1年生の時に大事に種を植え、大事に育て、6年生の時に卒業証書になる。ロギール氏は「10年、20年、30年後に子どもが証書を見て、この経験を思い出してくれたら何より。地域の歴史・文化・自然を大切に思う子に育ってくれれば」と語る。

第8回博報教育フォーラム　「ポスターセッション」より

# ポスターセッション風景

## Case.1 顔がつながる島ネットワークを日本中に

沖縄県立八重山特別支援学校の生徒たちがつくった授産製品。生徒たちは就業体験なども重ねている。

**Q 特別支援の各機関の連携はどうすれば上手くいきますか?**

**A** フットワークを軽くして、関係機関に自ら出向き、フェイスtoフェイスでコミュニケーションを図っています。その積み重ねにより、柔軟な姿勢に変化してきたように思います。

## Case.2 学校と匠と子どもたちの絆でつなぐ伝統文化

◀ 西陣織の生糸。

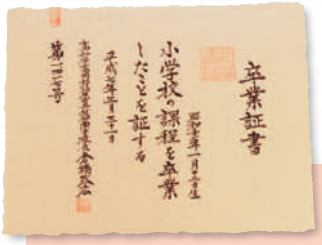
◀「にじの学習」文集。「家族にいつもお世話になって、ありがとうという気持ちをこめて生けました」という子どもの感想もある。

**Q コミュニティティーチャーとの打ち合わせでは、何を大切にしていますか?**

**A** 「こんな力をつけるために、こんな活動にしていきたい」と、学校側の学習意図など、打ち合わせを密にし、互いに求める児童の姿を共有しています。

## Case.3 土佐和紙を通して地域の文化と自然の大切さを伝える

◀ ロギール氏が紙漉き体験で使用する道具類。




▲ 子どもたちが漉いた卒業証書。一枚一枚、校長先生が筆で書く。

**Q 椿原以外の地域でも紙漉きを教えにきてもらえますか?**

**A** はい、喜んでお伺いします。紙漉きの費用はそれほど多くはかからないと思います。特別な施設もいりません。椿原小学校では家庭科室を使って体験活動を行っています。

第8回博報教育フォーラム　「パネルディスカッション」より

# 「学びをシェアする」ために

「学びをシェアする」とは何か。「パネルディスカッション」では、出演者と会場が一体となり、新しい学びが生まれる具体的な条件や場面を考え、豊かな90分間をシェアしました。

## 学びをシェアしたエピソード

**嶋野（コーディネーター）**

「学びをシェアする」というテーマですが、まずイメージを共有したいと思うんです。

私は以前、ある陶芸家が子どもに教える授業を見ました。1年目、陶芸家は子どもの正面に立ち、「それじゃあだめだ」と叱って怖いんですね。ところが2年目、同じ陶芸家が子どもの後ろから手を回し、その子の手に自分の手を重ねて、「きみの手の動きがそのまま器になるんだよ」と優しく接している。「子どもは面白い。自分も学ぶものがある」なんて言って。これもひとつの「学びをシェアした」例だと思います。

**ロギール**　紙漉きに使う水を汲みに行った時のことです。私自身は例年通りの沢で水を汲もうと考えていました。準備ができて、「じゃ、やろうか」という時に、6年生の子が急に「あっちの方がいいと思う」と言いだしたんです。

自分たちが生まれ育った山なので、子どもたちは私よりも水汲みに適した場所を知っているかもしれない。相談をせずに決めていた私に、子どもたちは遠慮なく「あそこはどう?」と話してくれました。そんな嬉しいこともあって、私の話の持っていき方はちょっと間違っていたかなと。自分の考えを子どもが自由に話せる環境ができたのが、学びのシェアだったと思います。

**大田**　西表島というのは実は教材の宝庫です。自然だけでなく、パイン産業、観光、稲作、酪農など、沖縄独自のいろんなことが教材になります。炭鉱、開拓の歴史と共に生きてきたシマンチュ（島人）一人ひとりが感動の人生を送っています。それを教材化するのは教師の腕ですね。

私はまず大人とつながります。夜、オジイと飲んで、昔の話を聞くと、私自身が感動します。子どもたちにそれを伝え、畑に行き、お家に行き、またオジイを呼んで、子どもたちと開拓の歴史を勉強します。

その成果を、子どもたちが学習発表会で演劇として発表します。発表会で子どもたちが演じると、

会場の人たちが、オジイも含めて、みんな涙するんですね。お年寄り、オジイたちが、自分たちの人生の素晴らしさを、子どもたちを見て感じるわけです。オジイの涙を見て、子どもたちも感動します。両者の涙を見て私も感動する。この感動の共有が、学びをシェアしたことかなと思います。

**清水**　学級を運営していく上で、子どもたちに、「こうしましょう」「ああしましょう」ということをついつい言ってしまう。

自分が言ったことを子どもたちがどう受け止めているか、その反応を見なければいけないと思うんです。それを見た時に、「子どもたちがこう思っているんやということを知って、自分も変わっていかなあかん」と思うんです。「こうしい、ああしい」と言うのではなくて、子どもたちの想いを受け止めて、自分がその想いを感じて、子どもたちから学んだことをどう伝えて、どう進めていったらいいかということを考えますね。

パネリスト

**鹿毛　雅治**
慶應義塾大学　教授

**大田　幸司**
沖縄県　沖縄県立那覇特別支援学校　教頭

**清水　玲子**
京都府　京都市立西陣中央小学校　研究主任

**アウテンボーガルト・ロギール**
高知県　WASHI STUDIO かみこや　代表

コーディネーター

**嶋野　道弘**
文教大学・大学院　教授

2005年より文教大学教育学部心理教育課程・大学院教育学研究科教授に就任。文部科学省初等中等教育局視学官・主任視学官などを歴任。主著に『教育の精神と形』（教育報道出版社）、『これからの生活・総合』（共著 東洋館出版）など多数。

## 謙虚と共感　想いと願い

**鹿毛**　基調講演の最後に、「表現」「活動」「謙虚・共感」というキーワードを挙げました。今のお話から、「謙虚・共感」は大事だなと思ったんです。

学ぶ姿勢に関して言うと、ロギールさんがおっしゃった水汲みです。「そうじゃないよ」と子どもたちが言った時に、私たちが問われていて、「その方がいいかもしれない」と思う。これは謙虚さではないでしょうか。

大田先生のお話やゆいまーるも、根底には自分は強くない、一人ひとりは非常に弱い存在であるという考え方が共有されていて、謙虚さがあるように思います。清水先生のお話にも、大人だから、子どもだからということではなく、「他者の他者性」といいますか、他者の想いを受け止める心構えがありました。

**清水**　「謙虚」というのは、本当に大事なキーワードだと思いました。活動現場でも、自分が思い込んでいたことと、実は全然違うことを思っていた子どもがいたりして。それを初めて聞かされた時はショックですね。謙虚さは大事な姿勢だと思います。

**大田**　「共感」は、保護者に寄り添う時になくてはならないものですね。障がいを抱える子どもたちを持つ保護者自身が、イバラの道を歩いています。保護者に寄り添う場合には、まず保護者の歩んできた道に共感することから始まります。

鹿毛先生の「ゆいまーるの基本は一人ひとりの力の弱さ、謙虚につながる」というのは、「そうだよね。謙虚さが連携を生むのかな」と思いました。

**嶋野**　会場の方から「これといった特色のない地域で、学校と地域のかかわりをどう築いていくか」という質問があります。でも、今のお話ですと、「ない」からこそできた?

**大田**　おっしゃるとおりです。ないからお互いに頼る。その中から何かを生んでいこうと。

**嶋野**　そういうところにシェアが起こる。「ないからできる」ということを根拠に、プラスへ転換していくのかな。

**鹿毛**　付け加えるとすると、「ない」環境でも「ある」ものは、「想い」とか「願い」だと思うんですよね。3つの事例発表には、子どもたちにこういうことを伝えたいとか、こういう地域や学校でありたいという、強い想いと願いを感じました。

**嶋野**　私もまさに「共感」ですね。ないから何とかしたい。そういう想いはどこにでもある。「学びのシェア」は極めて前向きな、情熱的な概念が支えているということが見えてきました。

## シェアが起きる要因

**嶋野**　そうしますと、私たちの関心は、「どうしたら『学びをシェアする』ことができるのか」ということだろうと思います。皆さん、いかがでしょう。

**清水**　私が経験したのは、「本物」の素晴らしさですね。これまで

ずうっと長い間受け継がれてきた文化と伝統というのは力があって、人々に訴えるものがある。それを私たちも子どもたちと一緒に見る、触れる、経験する。その経験はシェアの大きな第一歩だなと思っています。

**ロギール**　「本物を見せたい」というのは基本ですね。私はわざわざオランダからやって来て、和紙を学んで子どもたちと一緒にやっている。話だけではなく、熱意とか想いとかを一生懸命、和紙を漉くことで伝えています。ですから、「モノ」ではなく「モノづくりの喜び」につながる。それから、たとえば授業の中の「水汲み」のようなステップを、水にかかわる他の分野の話にもつなげて、あっち行ったり、こっち行ったりしながら、少しずつ世界をつくっていきます。

時間オーバーして迷惑をかけますが、先生方は「続けてください。後でカバーします」と言ってくださいます（笑）。

**鹿毛**　大田先生が発表の中で、バトンリレーの写真をずいぶん使われていた。シェアとは、「つなぐ」ということですね。

ひとつは時間軸上のことがあったと思います。清水先生の西陣中央小の伝統文化とか、まさに日本の伝統の代名詞のような、豊富な文化の地域、その過去から現在につないでいる。

ロギールさんがおっしゃっていたことでは、学びに「ゆとり」がある。効率重視の教育観と違いますよね。

## いい空気をつくるには？

**嶋野**　会場からの質問で非常に多かったのが、鹿毛先生が基調講演で話された「学びの場の空気をつくるにはどうしたらいいのか」という問いでした。どなたかお答えいただけますか。

**清水**　子どもたちが活動の時にすごく熱心に集中する。感動しつつ、自分たちもできる喜びを味わう。子どもたちが主体的に取り組みたいという想いを強く持っている時は、子どもたちの学ぶ姿勢が空気をつくっているように思います。

**大田**　私は「地域の空気」が学校の空気にものすごく影響している

と思っているんですね。地域に根ざした教育実践を行うことで、地域に認められた存在になることが学校ではないか。八重山地域では「学校を大事にしよう」という空気が伝わってきます。地域の学校への関心をいかに引き上げていくか、そういった視点も大事ですよね。

**ロギール**　地域のおじいちゃん、おばあちゃんは紙漉きが盛んな、昔のワイワイした地域を思い出しながらやっています。今では「やるぞ！」と自然に空気が流れて、梼原の「新しい伝統」になってきました。

**大田**　場の空気ということで言えば、私たち特別支援学校のセンター的役割でしょうか。障がいのある子どもたちがこんなに頑張って、こんなに成長したという感動や、これからも、明日も、特別支援教育を頑張って続けていく

明日を担う子どもたちに贈る。「学びをシェアする」で得た、パネリストたちのキーワード。

意欲をシェアしよう。そして、ここにも仲間がいるという安心感をシェアしよう。「感動、意欲、安心感をシェアしよう」ということを校内研修で共に考えています。

**嶋野**　和紙で漉かれた卒業証書は丸められないで、どこの家でも額にきちっと飾られる。長年の間に、むしろ空気をつくっている。私たちが空気を敏感に感じて、生かさなくてはいけないということですね。

**鹿毛**　いい空気をつくるには時間がかかると思うんですね。でも、悪い空気はすぐできる。怖い先生が出てくると急に悪い空気になりますね。

授業中に子どもたちが手を挙げたか挙げないかとか、発言したかしないかというより、教室の空気に敏感になることが私たちに求められている気がします。その空気の背後にある「想いと願いのシェア」というのが絶対に必要だなと思います。

ロギールさんが「新しい伝統になる」とおっしゃいました。その背後には、ロギールさんだけでなく地域の想いと願いがある。

私は空気をつくるのは、ハウ・ツーではないと思います。いい空気のつくり方はないので、むしろ想いの質が問われるし、繰り返しというか、そのプロセスには効率的でない紆余曲折もある。私たちは「効率の教育なのか、学びのシェアなのか」、教育観の大きな分水嶺に立っていると思うんです。

## 学びをシェアするキーワード

**嶋野**　最後に、「学びをシェアする」ためのキーワードをお書きいただきたいと思います。

**ロギール**　「Play　Together」です。匠はちょっと怖いイメージもあるかもしれませんが、子どもも大人もいい空気をシェアしながら、共に取り組もうという意味ですね。

**清水**　「心が動く」です。学びを積み重ねていくと、同じ場にいる子ども、匠の方、指導者、教師の心が動く。心が動くとは、とても大切な姿勢だと思います。そういう空気を大事にしていかなければと思います。

**大田**　「コオペレーション」「コーディネーション」「コラボレーション」です。「実践から、協力、連携、共働へ」ということですね。3つの「co」のために、関係者がバトンリレーをつないでいくことかなあと思いました。

**鹿毛**　「感謝」という言葉にしました。私は「情報のシェア」と「学びのシェア」は違うという話をしました。いい空気をシェアした時、そこには、謙虚に学び合って、共感し合って、感動して、「ありがとう!」となる。情報や効率性の教育観に対し、場や空気を大切にし、謙虚に共感して感謝する。そんなゆとりが必要だと思います。

**嶋野**　「熱き想い」。想いは、表にガーンと出るものと、内に秘められた熱い想い、2種類あると思います。いずれにせよ、シェアするには熱い想いがないといけない。面と向かって子どもに見せていく方法もありますが、それこそ、謙虚に、穏やかに、子どもに伝える方法もあると学びました。今日のフォーラムの内容を、一人ひとりが持ち帰り、考えていただければ、「学びをシェアできた」ことになるのかなと思います。会場の皆さんありがとうございました。

博報財団
HAKUHO FOUNDATION
子どもたちと、未来のあいだに

## 博報財団は次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を続けています。

当財団は、株式会社博報堂が教育雑誌の広告取次業として1895年に創業以来、次代を担う児童の育成を重視して教育・文化面において行ってきた数々の支援事業の精神を引き継ぎ、1970年に財団法人博報児童教育振興会として設立されました。
以来、次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の支援を目的に活動を続けています。
新公益法人制度の施行に伴い、公益財団法人として認定され、2011年4月、博報財団（正式名称：公益財団法人博報児童教育振興会）としてスタートしました。

### 博報賞 ― 児童教育の最前線で優れた教育を実践している方々を顕彰します ―

博報賞は、児童・生徒に対する日常の教育現場で貢献・努力されている、学校・団体・教育実践者を顕彰することを通して、児童教育の現場を活性化させ、支援することを目的としています。

### フォーラム参加者の声をご紹介します

なかなか得ることのできない情報、知識が得られると共に学びのシェアについて考えるきっかけとなった。様々な地域、立場の方からのお話を聞き、多くの事例に触れることができ、とても学ぶことの多い1日となった。
……（大学生）

全国各地の学校でたくさんの学びが展開されていることを知りました。テンポが速い時代に効率的に活動することのよさだけにのっている人が多い中で、純粋に「学び」について考える時間を共有できたことに感謝します。
……（教諭）

教育は、教師が一人で抱えるものでなく広く、地域、家庭、社会と、かかわりをもって進めていくものを目指し、多くの方の愛情で支えられてはぐくむべきものと感じました。子どもに対しても、上に立とうと力むことなく、伝えるべきことは伝え、感動を共有し楽しんで授業をつくっていこうというスタンスに立てば、いい空気になり、ストレスでつぶれる教師も減るのではないでしょうか。明るい気分になりました。
……（研修センター 統括指導主事）

学びのシェアには、教師も謙虚な気持ちを持ち、感動する心を持つ、感動する・できる場に出会うことが大切だと思います。鹿毛先生のお話を聞き、共感できること、学ぶことがたくさんありました。3人の先生の実践のスケールの大きさに驚いています。ロギール氏の話しぶりに温かい人柄を感じました。
……（小学校教諭）

「学びのシェア」は、児童同士、児童と教師や地域の方々、教師同士、教師（学校）と地域、地域全体、というように、いくつもの階層に亘って持たれ、スパイラルに拡がっていく活動であると感じました。
……（公立小学校教諭）

全国のすばらしい実践を知ることができ、総合的な学習の時間が大切だと言われている訳がよくわかった。しかしながら、そのような地域との連携や、伝統的な文化がない地域もある。そういった地域の学校に、今回のような実践が果たしてできるのか。考えたいと思った。大変刺激になった。
……（小学校教諭）

それぞれの地域の学校が、それぞれ独自の環境の中で、地域の特色を生かした取り組みをしていることに感銘を受けました。自分達の所にはないからとあきらめるのではなく、自分達の所では何ができるのかを考え、取り組んでいくことが何よりも大切であり、教育の根幹であると気づかされました。
……（小学校総括教諭）

ライブ感がすばらしい。
毎年、継続してほしい。切望する。
……（大学教員）

今やっていることが当たり前のようになってしまい、「空気に敏感になる」というキーワードを聞いた時にハッとさせられました。新指導要領の完全実施を控え、どう教えるかを自分だけ、もしくは周りの人だけで考えるという状態に陥っていましたが、謙虚さと共感の心を持って、もっと外からも情報を集めようと心に決めました。
今回の教育フォーラムに参加させていただき、もっと余裕を持って（ゆとりを持って）、その中で熱く教育について考えていこうと決意しました。
……（小学校教諭）

### 編集後記

今回のテーマ「学びをシェアする」は、大人の世界の「情報」と同じように、自分が持っているものを閉じ込めたり押し付けたりするのではなく、共有し、共に考え、深めることによって、大きな学びが生まれるのではないかという想いからスタートしました。そして、半日のプログラムの中から、知識や技能に限らず、感動や意欲、場や空気もシェアできるということ、またそのために大人の感受性や謙虚さが大切であることを学びました。

博報教育フォーラムでは、これまで3回に亘り、子どもたちの人生を変えるような「大きな学び」につながる学びの形について考えてきました。今回もまた、教育実践者、地域、保護者の方々に、「大きな学び」について考えていただくヒントにしていただきたいという想いを込めて、このレポートをお届けします。このフォーラムをライブで体験しませんか？皆様のご参加をお待ちしております。

発行/ 公益財団法人 博報児童教育振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂2-11-7 ATT新館8階　TEL.03-5570-5008 FAX.03-5570-5016
URL www.hakuhodo.co.jp/foundation/

Naturally Printing Naturally
PRINTED WITH SOYINK
ENERGY GREEN
この印刷には環境に配慮した「水なし印刷」と「大豆油インキ」を採用しています。また消費電力の一部はCO2を排出しないグリーン電力を使用しています。